

人間言語にみられる助動詞を用いたモダリティ表現の普遍性

秋庭大悟（国際言語情報研究所）

概要

世界中の言語において同様の多義性を持つ助動詞が観察され、それぞれの解釈における助動詞のふるまいの違いに関しても通言語的に共通の性質が見られる。当研究では助動詞の多義性に見られる普遍性から人間言語の統語と意味のインターフェースにおいてモダリティ（法）表現の果たす意味を考察する。

1. 助動詞の多義性

(1) John must go to the party.

- ジョンはパーティに行かなければならない。
- ジョンはパーティに行くに違いない。

(2) John may go to the party.

- ジョンはパーティに行ってもよい。
- ジョンはパーティに行くだろう。

(3) 助動詞の多義性

- 根源的モダリティ解釈：義務・可能・許可などを表す。
- 認識的モダリティ解釈：発話された命題の真偽値に対する話者の判断を表す。

(4) 各言語における多義的なモダリティの例

英語：may（許可・推量）、must（義務・推量）
西/葡語：poder（可能・推量）、dever（義務・推量）
ドイツ語：müssen（義務・推量）
トルコ語：-(y)abil-（可能・推量）
古典日本語：べし（可能・推量）

通言語的に助動詞が同様の多義性を持つことは偶然とは考えられず多義性の背景には人間言語に共通する普遍的な要因があると思われる。

2. 極小理論における文の派生

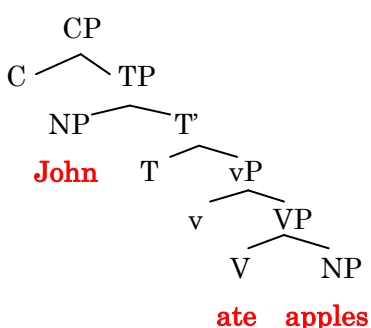
（詳しくは 1990 年代以降の Noam Chomsky の著作を参照）



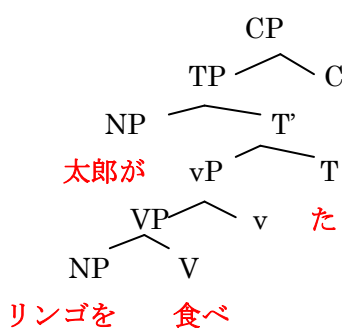
統語部門で作られた構造が音韻部門と意味部門へと送られ、それぞれの部門で、統語部門で作られた構造をもとに、音の情報や意味の情報が与えられる。また、極小理論で仮定する文の構造を以下に簡略的に示す。

(5) [CP [TP [vP [VP]]]]

(6) 英語



(7) 日本語



Chomsky(2000,2001)では統語部門における派生の単位としてフェイズ（CP と vP）を提唱し、構造がフェイズ単位で作られると仮定する。また、近年、統語部門から音韻部門・意味部門への情報の転送もフェイズごとになされていると考えられている。

3. 法助動詞の解釈とフェイズ理論

法助動詞が解釈によって異なるふるまいを見せる主な現象を以下（8）にまとめる。以下、識的解釈をEM、根源的解釈をRMで示す。

(8)

- 語順：多くの言語で多義的な法助動詞が C 位置に現れた際に EM、v 位置で RM の解釈のみを受けるようになる例が観察されている。
- 作用域：EMとRMは作用域が異なる。
 - EM > 時制(T) > RM EX) John could go to the party.
 - EM > TP 付加副詞 > RM EX) In general students must study hard.
 - EM > 数量詞 (TP 付加) / RM > 数量詞 > RM EX) Everyone must win the prize in the lottery.
- 多重法助動詞構文：助動詞を 1 文内に 2 つ以上使用できる言語において、構造的に一番高い位置にある助動詞のみが EM の解釈を受ける。
EX) He should can go tomorrow. (Brown 1991:74 スコットランド方言)
- VP 削除：V P 削除構文に現れる法助動詞は RM の解釈しか持たない。
EX) John must go to the park and Bill must, too.
- コントロール：ある種のコントロール構文で法助動詞は RM の解釈しか持たない。
EX) The books must be sold without reading them.

当研究では EM と RM のこうした振る舞いの違いに関して、上記 a と b より EM は CP フェイズ内で解釈を受け、RM は vP フェイズ内で解釈を受けるのではないかという仮説を立てる。このように考えると、通言語的に観察される法助動詞の多義性が 2 つに限定されているのは、フェイズの種類が C と v の 2 つであることから説明される。

また、Chomsky(2001)ではフェイズは「命題的である」と述べられ、C P フェイズは文全体の命題をカバーし、vP フェイズは動詞とその項（主語・目的語）との関係を表わすとされている。ここで（1）の英語の must の意味を考えてみると、EMのときは「ジョンがパーティーに行く」という命題全体に対して話者がそれが起こるのが「必然」であるととらえており、RMのときは「ジョン」が「行く」という述語の主語となることが「必然」であることを表わしている。つまり、法解釈とはフェイズ単位で統語部門から意味部門へと情報が送られる際に、その「確かさ（必然性や可能性の度合い）」に関する情報を付与するものとして機能していると捉えられる。

4. まとめ

当研究では、通言語的に観察される法助動詞の持つ多義性をフェイズ理論の枠組みの中で説明し、（8）に示したものをはじめとする EM と RM それぞれの解釈で異なるふるまいを見せる現象を説明することを目指している。

参考文献

- Chomsky, Noam. 2000. "Minimalist Inquiries." In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. Cambridge; MIT Press
- Chomsky, Noam. 2001. "Derivation by Phase." In Michael Kenstowicz, (ed.) *Ken Hale: A life in Language*. Cambridge; MIT Press. 1-52.
- Brown, Keith 1992. Double modals in Hawick Scots. In P. Trudgill and J. K. Chambers (eds.) *Dialects of English: Studies in grammatical variation*. London: Longman. 74-103.